

元曲公案劇の構成

— 事件・人物関係・配役 —

村上公一

はじめに

筆者は以前「三言・二拍」を中心とする宋元明の短篇白話小説の中の公案作品（裁判物）の時代による変質を、そこに描かれている冤罪の分析を通して考察することを試みたことがあるが、戯曲の公案作品には触れなかった。^①そこで、今回は冤罪事件を題材とする元曲公案劇を取り上げ、冤罪死の回避を含めた作品の類型化について考えることにする。

一

現存する元曲の中で冤罪事件を中心テーマとする作品は全部で八篇ある。^②

「旦本」（女主役本） 五篇

①「救孝子賢母不認屍」（元曲選本）

②「包待制知縣灰闌記」（元曲選本）

③「感天動地竇娥冤」（古名家雜劇本・元曲選本・酹江集本）

④「錢大尹智勘緋衣夢」（古名家雜劇本・顧曲齋本・脈望館鈔本）

⑤「清廉官長勘金環」（脈望館鈔本）
「末本」（男主役本）三篇

⑥「神奴兒大鬧開封府」（元曲選本）

⑦「河南府張鼎勘頭巾」（古名家雜劇本・元曲選本）

⑧「張孔目知勘魔合羅」（元刊本・古名家雜劇本・酹江集本・元曲選本）

これら八作品はいずれも、〈事件〉から〈冤罪〉そして〈釈冤〉という同一の展開を見せるが、この他にも様々な類似点を指摘することが出来る。

一、事件の内容

二、被害者、冤罪者、加害者の関係

三、配役

四、事件への手続き

五、冤罪への手続き

六、釈冤への手続き

本稿ではこれらの中から作品全体の内容・構成に関わる一から三までについて見ていく。

まず八作品の概要を以下に示す。³⁾

①「救孝子」…開封府の軍戸楊家の寡婦李氏は軍兵の徴集

に際し、二人の息子の内、実子で長男の興祖を軍務に就かせ、妾の子謝祖を家に残す。徴兵官王脩然はこれに感心する。〈第一折〉謝祖は里帰りする兄嫁春香を途中ま

で見送る。推官の下女を拐かし死なせてしまった賽盧医は、通りかかった春香の衣服を下女の死体に着せ春香の持っていた小刀で死体の顔を切りつけ、春香を連れて去る。〈楔子〉半月後死体が発見される。春香の母親は、

通りかかった推官に、謝祖がいたずらして殺したと訴える。推官から審理を任された令史は検死もせずに死体を燃やしてしまう。〈第二折〉拷問の末、謝祖は兄嫁殺しを自白する。李氏は息子の無実を訴え続けるが、自白と証拠の小刀により謝祖は死囚牢に入れられる。〈第三折〉

軍役からの帰途、興祖は妻と出会い賽盧医を捕まえる。

河南府では王脩然が謝祖を再度取り調べることになる。

興祖一行が河南府に着き事件は明らかになる。〈第四折〉

②「灰関記」…鄭州の張林は母と妹を残し家出をする。海

棠は老いた母を養うために馬均卿の妾となる。〈楔子〉

馬均卿の本妻は鄭州府の趙令史と私通している。海棠の生んだ子供の五歳の誕生日のお祝いに馬均卿と本妻が出掛けている間に、無一文の兄張林が訪ねて来る。海棠は帰宅した本妻の勧めで張林に自分の衣服を与える。本妻は馬均卿に海棠が私通相手に衣服を与えたと言う。本妻は怒りのあまり不快となった馬均卿のために海棠に作らせたスープに毒を入れ、馬均卿を殺す。本妻は海棠に子供を残して家を出ることを求めるが、海棠が拒絶したため、夫殺しとして訴える。〈第一折〉鄭州太守から審理を任された趙令史は拷問して海棠に罪を認めさせ、子供も本妻が生んだものとする。〈第二折〉海棠は開封府に護送される途中で今は開封府の下役人をしている張林と出会う。護送役人に海棠の始末を頼んだ趙令史は本妻と共に様子を見に来る。張林は捕らえようとするが逃げられる。〈第三折〉開封府尹包拯が再審に当り、子供の手を本妻と海棠の二人に引つ張らせ、先に手を放した海棠を本妻の母親と認め、本妻と趙令史の罪を明らかにする。〈第四折〉

③「竇娥冤」…楚州の秀才竇天章は借金のかたに娘(竇娥)

を蔡婆の家に嫁としてやり、都に試験を受けに行く。

〈楔子〉蔡婆の息子が死んで三年、蔡婆は賽盧医の所に借金の取り立てに行き殺されそうになったところを張

驢児父子に救われる。張父子は助けた礼として、二人を蔡婆と寶娥の婿にするよう求める。寶娥は拒絶するが、二人は同居することになる。〈第一折〉蔡婆毒殺を計る張驢児は賽盧医から毒薬を手に入れ、寶娥が蔡婆のために作ったスープに入れる。スープは父親が飲み死ぬ。張驢児は寶娥に自分の妻になることを求めるが、寶娥が拒絶したため義夫殺しとして訴える。太守は幾ら拷問しても寶娥が自白しないので、蔡婆を打とうとする。それを見て寶娥は罪を認める。〈第二折〉寶娥は刑場で、無実ならば、血は全て旗竿の白絹に収まり、夏にも拘らず雪が降り、楚州に三年の干ばつが有ると叫ぶ。事実その通りになる。〈第三折〉三年後役人として楚州に戻ってきた寶天章の所に寶娥の幽霊が現れ、事の次第を訴える。

寶天章は事件の再度取調べを行い、寶娥の幽霊の力を借りて張驢児と賽盧医の罪を明らかにする。〈第四折〉

④「緋衣夢」…王德富は娘閨香の婚約者李慶安の家が貧乏になったので、閨香の作った靴と十兩の金で破談を申し出る。王家の庭の木に引っかかった風を取りに来た慶安を見つけた閨香は、夜中に下女梅香を通して嫁取りに必要な金財を渡す約束をする。〈第一折〉富徳に衣服の質入れを断わられた裴炎は夜中に王家に忍び込み慶安を待っている梅香を殺し金財を奪う。遅れて来た慶安は梅香の死体に驚いて逃げ帰る。事件を知った富徳は慶安を捕ら

え、役所に訴える。官人から審理を任された令史は富徳から賄賂を受け、慶安を拷問して罪を認めさせる。新任の開封府尹銭可は事件の再審を行い、慶安の寝言から真犯人の名前が裴炎であることを知る。配下の寶鑑と張弘に逮捕を命ずる。〈第二折〉寶鑑と張弘が休んでいる茶店に、裴炎が現れる。張弘が行商人に扮し裴炎の妻を騙して犯行に使われた刀を自分の家のものと認めさせ、裴炎を捕らえる。〈第三折〉銭可が新たに裁きを下し、慶安と閨香は結婚する。〈第四折〉

⑤「勘金環」…李仲仁は弟夫婦(仲義、王臘梅)に妻孫氏の弟で居候の孫栄を追い出すことを求められ、孫栄は科擧の受験に都へ行く。〈楔子〉弟夫婦は仲仁に財産分けを求め、社長(庄屋)を取り込んで有利な財産分けをする。〈第一折〉仲仁は王婆の置き忘れた耳飾りを飲み込み死んでしまう。弟夫婦は孫氏に子供を残して家を出ることを求めるが、孫氏が拒絶したため、夫殺しとして役所に訴える。〈第二折〉県官から審理を任された令史は仲義から賄賂を受け、沈成に検死をさせる。仲義から賄賂を受けた沈成は耳飾りを隠し、毒殺と報告する。令史は孫氏を拷問して罪を認めさせる。銀細工屋で仲仁が飲み込んだ耳飾りを見つけた王婆はそれを売った沈成の妻を役所に訴える。〈第三折〉三年後役人となって帰ってきた孫栄が再審を担当するところへ、王婆が沈成の妻を訴

え出て、事件は解決する。〈第四折〉

⑥「神奴兒」…李德仁は弟夫婦(李德義・王氏)に財産分けか妻陳氏)との離婚かの二者択一を迫られ、憤死する。

〈第一折〉院公(下男のこと)は李德仁の息子神奴兒を連れて町に出かけるが、目を放した際に李德義に連れ去られる。途中で包拯の下役(何正)にぶつかる。〈楔子〉

王氏は神奴兒を殺す。院公と陳氏は神奴兒を捜し求める。夜院公の夢に神奴兒の幽霊が登場し、李德義に連れ去られ王氏に殺されたと告げる。〈第二折〉翌朝、院公と陳氏は李德義の家に行き詰問する。李德義夫妻は陳氏に家を出ることを求めるが、陳氏が拒絶したため、陳氏と院公を神奴兒殺害の犯人として県に訴える。県官から審理を任された令史(胥吏)は李德義から賄賂を受け取り、拷問して陳氏に罪を認めさせる。〈第三折〉包拯が再審に当り、何正の証言と神奴兒の幽霊の助けにより真相を明らかにし、一件は落着する。〈第四折〉

⑦「勘頭巾」…王小二は劉平遠と喧嘩をし、「殺してやる」と叫ぶ。劉平遠の妻は百日以内の夫の死は全て王小二の責任との約定書を取る。〈第一折〉劉平遠の妻は私通の相手王知観に夫を殺させ、王小二を犯人として役所に訴える。〈楔子〉府尹から審理を任された令史は王小二を拷問して罪を認めさせる。牢屋で令史から被害者の頭巾の在処を問いただされた王小二は出たら目に答える。そ

の場に居合わせた農夫からそのことを聞き出した王知観は先回りして証拠の頭巾を置いておく。新任の府尹完顔は王小二に死罪を言い渡すが、六案都孔目張鼎は審理のやり直しを求める。〈第二折〉張鼎は農夫から事情を聞き、劉平遠の妻を騙して事件の真相と犯人の名前を聞き出す。王知観も捕らえられ、罪を認める。〈第三折〉張鼎の審理の結果を承けて、府尹が新たに裁きを下す。

〈第四折〉

⑧「魔合羅」…李德昌は一百日の災を避けるために妻(劉氏)と子を残して行商の旅に出る。〈楔子〉町の近くで病に倒れた德昌は魔合羅売りの高山に妻への連絡を頼む。〈第一折〉高山は德昌の従弟文道に道を尋ねる。日頃より劉氏に思いを寄せている文道は、高山に嘘の場所を教え、先に德昌の所に行き毒殺する。高山の知らせを受けた劉氏は德昌を家に運び込むが、既に死んでいる。文道は劉氏に自分の妻となることを求めるが、劉氏が拒絶したため夫殺しとして訴える。県官から審理を任せられた令史は文道から賄賂を受け、劉氏を拷問して罪を認めさせる。〈第二折〉新任の府尹完顔は劉氏に死罪を言い渡すが、劉氏に同情した六案都孔目張鼎は審理のやり直しを求める。〈第三折〉張鼎は先ず劉氏から高山のことを聞き出し、次に高山から文道のことを聞き出し、文道を聞き出し、次に高山から文道のことを聞き出し、文道親子を騙して罪を認めさせる。張鼎の審理の結果を承け

て、府尹が新たに裁きを下す。〈第四折〉

二

八作品が「事件」から「冤罪」そして「釈冤」という同一の展開を持つことについては今更説明の必要はあるまい。事件の内容については、全てが痴情か財産独占あるいはその両者を動機とする殺人事件という共通点を持つ。また登場人物(被害者・冤罪者・加害者等)の關係にも共通する点が多く見られる。以下、冤罪者の性別により大きく分け、個々の作品に沿って説明していく。

女性が冤罪に陥るものは、「神奴兒」「魔合羅」「灰闌記」「寶娥冤」「勘金環」の五作品。「神奴兒」では院公も冤罪に陥るが、物語の中心はあくまでも主人(陳氏)なので、ここでは女性の側に入れる。

「灰闌記」の張海棠は、財産の独占を目論む本妻とその愛人の犯した夫殺しで、本妻に夫殺しとして告発される。

「勘金環」の孫氏は、財産独占を目論む弟夫婦に実の弟を追いつけられ、更に夫の事故死に際し、弟夫婦から夫殺しとして告発される。

「神奴兒」の陳氏は、財産の独占を目論む弟夫婦に夫を死に追いつけられ、更に子供を殺され、弟夫婦に子殺しと

して告発される。

この三作品に共通するのは、財産独占を動機として殺人が為されること。殺されるのは夫、兄、兄の子といった財産を相続している(する)人物。犯人は弟夫婦、本妻と愛人。どの作品でも女性が主導権を握っている。そして彼女達には子供が無い。一方、冤罪に追いつけられる張海棠、孫氏、陳氏には子供があり、一族の財産は全てこの子供に相続されることになる。事件が起こると、犯人側は示談(子供を残して身一つで家を出る、「神奴兒」では子供も殺されているので、身一つで家を出る)か裁判かの選択を求める。犯人側は示談を期待するのだが、彼女達は進んで裁判での決着を求め、結果として冤罪の淵に沈むことになる。示談の提示については「冤罪への手続き」で改めて取り上げるが、ここで注意したいのは、彼女達が示談を選べば家庭内の出来事として内々に解決することも可能であったという点である。つまり、一家庭に属する人々(愛人も含む)によって起こされた一家庭内の事件が、追いつめられた側の決意によって公の場に引きずり出されたのである。

次に「寶娥冤」「魔合羅」はいずれも痴情による殺人。「寶娥冤」の寶娥は、義兄(義父の息子)に言い寄られたのを拒絶した結果、誤って自分の父親を殺した義兄に義父殺しとして告発される。

「魔合羅」の劉氏は、夫の従兄弟に言い寄られたのを拒

絶した結果、夫を殺され、従弟に夫殺しとして告発される。

男達は寶娥や劉氏を自分のものにするために、最大の障害物である彼女達の夫や母親を殺す。「寶娥冤」では誤って自分の父親を殺してしまうことになる。殺人の後、先の三作品と同様、示談の提示がなされる。内容は自分のものになること。当然男達は示談を選ぶことを期待し予想している。ところが寶娥と劉氏は裁判を選ぶ。ここでも、一家庭内で起きた事件が、このことによって公の場に引きずり出される。そして冤罪が形成される。

女性が冤罪に陥るこれらの作品では、冤罪は一家庭内で起きた私的な出来事を、弱者の側が泣き寝入りせずきつぱりと公の場に持ち出すことによって生じる。

男性が冤罪に陥るものは、「救孝子」「緋衣夢」「勘頭巾」の三作品。

「救孝子」の楊謝祖は、全くの他人の犯した誘拐殺人に巻き込まれ、兄嫁の実家から殺人犯として告発される。

「緋衣夢」の李慶安も、全くの他人（婚約者の家に恨みを持つ者）の犯した下女殺人に巻き込まれ、婚約者の父親から殺人犯として告発される。

「勘頭巾」の王小二は、妻と間男の共謀した夫殺しという他人の家の出来事に巻き込まれ、犯人の計略により、殺人犯として告発される。

つまり「救孝子」「緋衣夢」では部外者が起こした事件

を一家庭内（結婚・婚約等によって形成されたものも含む）に引き寄せる形で、「勘頭巾」では一家庭内で起きた事件に部外者を引き寄せる形で解釈することによって冤罪が形成されている。ここでも一家庭内での事件という基本線は変わっていない。しかし女性が冤罪者となる作品では元々一家庭内の事件であり、彼女達の属す家庭内部に事件の要因、冤罪の要因が存在していたのに対し、これらの作品では彼達の置かれている状況が事件そのものを引き起こしたのではないという違いがある。彼達は事件とは本質的に無関係なのである。示談の提示もここではなされない。降って湧いたような濡れ衣に呆然と為すすべもなく裁判の場に引き出されていく。冤罪に陥る男性にはきつぱりとしたところがなく、それを示すチャンスすら与えられない。彼達には終始弱々しいイメージが付き纏う。

三

冤罪者の性別による相違は、脚色（配役）にも深く関係してくる。

元曲では一劇通して一人の俳優しか唱わないという約束がある。その俳優を女性なら正旦、男性なら正末と呼び、正旦用の脚本を旦本、正末用の脚本を末本と称する。旦本

か末本か、また正旦・正末が誰を演じるかによって作品の性格は全く変わってくることになる。

先ず且本を取り上げるが、正旦の扮する役により二種類に分かれる。

「灰蘭記」「勘金環」「寶娥寛」では正旦が張海棠、孫氏、寶娥といった冤罪者を演じる。以下個々の作品に沿って説明していく。

「灰蘭記」…冤罪者の張海棠が正旦に配される他、真犯人の本妻に搦旦、その愛人趙令史に浄。初めの裁判を担当する役人は大守が浄、令史は本妻の愛人趙令史(浄)。真相を明らかにする包拯は沖末。それを助ける張海棠の兄張林も沖末。殺される馬均卿は副末。

「寶娥寛」…冤罪者の寶娥が正旦に配される他、真犯人の張驢児と賽盧医、悪徳県官が浄(張驢児は副浄となっているが、二人目の浄のこと)。寶娥の父親であり冤罪を晴らす役人の寶天章は沖末。義父と蔡婆はそれぞれ孝老、卜児。

「勘金環」…冤罪者の孫氏が正旦に配される他、彼女を陥れる李仲義が沖末、王臘梅が浄外旦。浄外旦は搦旦と同一のものであろう。悪徳役人の官人、令史、検死人の沈成は浄。孫栄の脚色が記されていないが、沖末か。王婆は外旦。銀匠は浄。

これら三作品に共通する配役として、冤罪者としての正

旦以外に、以下のものを確認できる。先ず犯人は浄と搦旦、「寶娥寛」では浄のみ。「勘金環」のト書きでは浄外旦となっているが、搦旦という脚色は『元曲選』以前には殆ど見られず、浄の女役としての浄外旦の方が本来の脚色であろう。李仲義が沖末なのは、元曲では最初の登場人物は基本的に沖末が扮することによる。悪徳役人は浄と丑のコンビ。但し丑という脚色も『元曲選』以前は少なく、元々はどちらも浄とされることが多い。また「勘金環」の銀匠も浄だが、浄は必ずしも悪役ではなく、単に滑稽味を帯びた役も演じる。この種の浄も令史の浄と同じく『元曲選』では丑に分化している。そして冤罪を晴らす役人は沖末が演じる。

「救孝子」と「緋衣夢」は冤罪者の母親、婚約者を正旦が演じる。

「救孝子」…冤罪に陥る楊謝祖が外(末)、その母親が正旦に配される。真犯人の賽盧医と悪徳役人の推官が浄、令史が丑。冤罪を晴らす役人の王脩然は沖末。楊謝祖の兄興祖は外(末)、誘拐される春香は旦児。

「緋衣夢」…冤罪に陥る李景安が小末、その婚約者が正旦に配される。第三折のみ茶店のおかみ。これは裴炎探索場面を劇中に設けたことによる。真犯人の裴炎は邦老、悪徳役人の官人が浄、令史はト書きに何も書かれていないが、他の作品と同じく浄(後に丑)であろう。冤罪を晴らす役人

は孤。⁷

この二作品では、冤罪者は年齢の違いから外末と小末に分かれている。また「緋衣夢」では真犯人が邦老、冤罪を晴らす役人が孤となっているなど脚色が具体的になっているが、実際には「救孝子」や他の作品と同様それぞれ浄、沖末が演じたものと推測される。⁸ところで、この二作品で冤罪に陥るのは男性である。正旦は獄中の男達に代わって嘆き、悲しみ、そして怒る。後にも述べるが、冤罪者の男性が正末に立てられることはない。

且本の配役は以下のように整理できる。

- 1 旦、末等の扮する人物が殺され、
- 2 正旦扮する人物が無実の罪で訴えられ、
- 3 浄・丑扮する悪徳役人の裁判で罪を自白せられ、
- 4 沖末扮する明察な役人の裁判で釈放される。

末本は「神奴児」「勘頭巾」「魔合羅」の三作品。

「神奴児」…真犯人の李徳義夫妻は、沖末と搦旦が演じる。正末は初めに憤死する李徳仁を演じ、その死後は院公を演じる。神奴児は俵児が、冤罪に陥る陳氏は大旦がそれぞれ演じる。初めに裁判をする役人は、県官・浄、令史・丑の配役。第四折で登場し真相を明らかにする包拯は正末が演じる。それまで正末が演じていた院公は牢獄で冤罪のまま死んでしまう。

「勘頭巾」…真犯人の劉平遠の妻とその愛人を旦と浄が演じ、冤罪に陥る王小二を丑が演じる。正末は殺される夫を演じる。初めの裁判を担当する役人は、府尹を浄が演じる。令史については卜書きに脚色についての記述がない。真相を明らかにする役人は、府尹を外が、実際に取調べをする張鼎を正末が演じる。⁹

「魔合羅」…殺される李徳昌を正末、犯人李文道を浄、冤罪に陥る劉氏を旦が演じる。犯人の父親は沖末。伝言を伝える高山は外が演じる。初めの裁判は県官・浄、令史・丑の配役。真相を明らかにする役人は、府尹を外、張鼎を正末が演じる。¹⁰

末本の配役は以下のように整理できる。

- 1 正末扮する人物が浄・搦旦扮する人物に殺され、
- 2 旦・末扮する無実の人物が訴えられ、
- 3 浄・丑扮する悪徳役人の裁判で罪を自白せられ、
- 4 正末扮する明察な役人の裁判で釈放される。

配役に関しては、正末が初めに被害者を演じ、後に裁判を担当する役人を演じることに、注意を払う必要がある。正末一人が唱うという約束の元に劇が進められる元曲では、正末が誰に扮するかによって劇の性格がほぼ決まると言ってもよい。これら三作品では、正末・正旦が一人に扮する劇に作り上げることも可能であった。加害者と冤罪者は基本的に作品の初めから終わりまで断続的に登場する。加害者

を正末に当てるのは観衆の心情にそぐわないかも知れないが、冤罪者であれば問題は無からう。且本では「灰蘭記」の張海棠、「寶娥冤」の寶娥、「勘金環」の孫氏など、冤罪者を正旦が演じる場合が多い。「神奴児」は王氏または院公(この場合院公は死なないことになる)、「勘頭巾」は王小二、「魔合羅」は劉氏を正末・正旦に当てることは可能である。また、正末のみの劇団のために書くなどの理由で、どうしても末本でなければならぬとしても、「神奴児」の院公、「勘頭巾」の王小二は可能である。また且本の「救孝子」「緋衣夢」も冤罪者を正末とする劇に作り上げることも可能であつたはずだ。しかし、現実には一劇通して冤罪者の男性を正末が演じる作品は無い。観衆は冤罪の淵に沈み嘆き悲しむか弱き男性よりは、さっそうと現れ事件を解決していく役人の方を主役に求め、作者もそれに合わせて正旦・正末を立てたのであろうか。冤罪の苦しみを嘆くのは女性が演じてこそ絵になり、男性には向かない、少なくとも正末の役どころではないと考えられていたようだ。唯一部分的に正末が冤罪者を演じる「神奴児」の院公は、自分の苦しみを唱うのではなく、主人(王氏)の苦しみ、怒りを代弁する形をとっている。

正末が後半で明察な役人を演じることになれば、前半で誰を演じるのかという問題が出て来る。都合の良いことに初めに人が殺される。殺されるのは必ず男性である。この

男性を正末が演じるということになる。被害者から明察な役人へとという改扮は、加害者に対する怒り、冤罪者に対する同情、真相究明への執念が人物が変わりながらも持続されることになり、観る者にとって非常にスムーズに行われたのであろう。

以上の人物関係と配役を表にまとめると次のようになる。

	作 品	冤罪者	被害者	真犯人	悪役人	明役人
且 本	灰 蘭 記	正旦	副末	浄 搦旦	浄 浄	沖末
	寶 娥 冤	正旦	李老	浄	浄	沖末
	勘 金 環	正旦	李仲仁	沖末 浄外旦	浄 浄	孫栄
	救 孝 子	外(末)	旦児	浄	浄 丑	沖末
	緋 衣 夢	小末	梅香	邦老	浄 令史	孤
末 本	神 如 児	大旦 正末	正末 係児	沖末 浄搦旦	浄 丑	正末
	勘 頭 巾	丑	正末	浄 旦	浄 令史	外(末) 外正末
	魔 合 羅	旦	正末	浄	浄 丑	外(末) 外正末

「救孝子」と「緋衣夢」の正旦は、それぞれ冤罪者の母親と婚約者

四

いままで見てきた作品は「神奴児」「寶娥冤」の二作品を除いては冤罪死は描かれない。冤罪者の悲劇は最後には正しい裁判によって救済されている。裁判は物語の世界の秩序立ての道具として有効に機能している。⁽¹⁾

冤罪死のあとでの釈放は、死に至る前に救済されるのと違い、一人の人間として考えれば、死んでしまった以上、無実の罪での死という悲劇は救済されようはない。また裁判そのものも物語の世界の秩序立ての道具として機能していないことになる。

それでは「神奴児」「寶娥冤」では冤罪死がどのように描かれているのか。

「神奴児」では正末演じる下男が第三折から第四折にかけて獄中で死ぬ。正末が演じていた登場人物であるにも拘らずその死はあつけない。作者は第四折で名裁判官包拯を正末に演じさせることにした以上、それまで正末が扮していた下男を何とか処理——舞台から消す——しなければならなかった。正末・正旦を一人で通すというのは元曲の約束である。こうして下男はあつてなく冤罪死することになる。

更に、実際に演じられた時には、この冤罪死は悲惨さを感じさせるものではなかったようだ。⁽²⁾

〔正末〕云「這文狀上有個老院公、可怎生不見。

〔外郎云〕院公下在牢中哩。

〔正末云〕他有甚麼罪過、下在死囚牢裏、與我提將來者。

〔張千云〕院公死了也。

〔正末云〕怎麼死了。

〔外郎云〕院公生一個大刺唬痛死了也。

〔せりふ〕この文書にある老院公はなぜ姿が見えん。

〔外郎せりふ〕院公は牢屋に入れてあります。

〔正末せりふ〕何の罪で死囚牢に入れてあるのだ。連れてまいれ。

〔張千せりふ〕院公は死にました。

〔外郎せりふ〕院公は大きなおできが出来て死にました。院公の死はこうして初めて観衆に知らされるが、つい先程まで自分自身が演じていた人物を連れてまいれと言う正末の姿は、以下の張千、外郎の答えと合わせ、滑稽ですらあったと思われる。また先にも述べたように正末が演じてはいるもののその役割は主人陳氏の心情の代弁者であり、院公の死によって物語の上に決定的な断絶が生じているわけではない。

「寶娥冤」でも正旦扮する寶娥が第三折で処刑される。そして第四折では寶娥は幽霊となって登場する。演じるのは前と同じ正旦。寶娥の苦しみは第四折にも引き継がれる。

〔雙調新水令〕我毎日哭啼啼守住望鄉臺、急煎煎把聾人等待。慢騰騰昏地裏走、足律律旋風中來。則被這霧鎖

雲埋、猿掾の鬼魂快。

【双調新水令】毎日しくしく望郷台にしがみつ、いら
いらと仇を待ちわびる。のろのろと暗がりを歩き、ふ
らふらと風の中を進む。霧と雲に閉ざされる中、せき
たてられて私は急ぐ。

第四折の正旦はこの唱とともに登場する。父親の帰郷を
知り急いで会いに来る状態を唱ったものだが、この幽霊の
寶娥は生前の苦しみをそのまま持続している。生か死かの
違いはあるが、寶娥そのものには些かの變化も見られない。
無論俳優も同一である。つまり生者だけの世界から死者を
も含む世界に広がった第四折の舞台では、寶娥は相変わらず
「生き」続けているのである。この苦しみを取り除かれ
ることを目指して劇は進行していく。そして正旦扮する寶
娥の幽霊は事件解決後、感謝の唱とともに退場する。ここ
では冤罪死する人物の幽霊が同一の役者によって継続的に
演じられることにより、冤罪死そのものの持つ絶対的な悲
劇性が薄められている。また裁判の秩序立ての道具として
の機能も維持されていることになる。

おわりに

元曲公案劇のうち冤罪事件を中心テーマとする作品の類
型化を事件の内容、人物関係、配役を中心にみてきたが、

財産、痴情にまつわる一家庭内の事件が公の場に引きずり
出されることによって冤罪が作り上げられる点、真犯人を
演じるのが浄と搽旦、悪徳役人を演じるのが浄と丑である
点は、冤罪者の性別、且本か末本かに関係なく全てに共通
する。冤罪者の性格は性別により区別される。女性達が示
談の申し出を断わり進んで裁判に臨むことに象徴されるよ
うに強い意志を持つ存在として描かれているのに対し、男
性達は一様におどおどし意気地が無い。これは正旦・正末
の立て方とも関係し、女性の冤罪者を正旦に立てることは
多いが、男性の冤罪者を正末に立てることは無い。この場
合、且本なら正旦が男性の冤罪者の近親者に扮する形を、
末本なら正末が被害者から明察な役人に改扮する形を取る。
冤罪死は「神奴兒」「寶娥冤」の二作品にのみ現れる。

前者は、正末の立て方により生じたものだが、冤罪死報告
の場面の滑稽味の中でその悲劇性は薄められている。後者
は生前と同一の役者が幽霊に扮することにより、冤罪死の
持つ絶対的な悲劇性が薄められている。

本稿では以上のことを論じた。「事件への手続き」「冤
罪への手続き」「釈冤への手続き」に見られる類型化につ
いては、紙面の都合で別の機会に論じることにする。

- (1) 「宋元明短篇白話小説に描かれた冤罪」(『名古屋大学中国語学文学論集四』一九八四)
- (2) ここで言う冤罪は、ただ無実の罪で訴えられるというだけでなく、一旦は無実の罪が言い渡されるものを指す。また、政治的な事件や、しかるべき役所による正式な裁判でないものは除外する。⑤の「勘金環」は『元曲選外篇』には収められていないが、『也是園書目』で明の作と明示されていないので、ここで取り上げる。
- (3) ④「緋衣夢」⑤「環金環」以外は元曲選本による。④⑤は脈望館鈔本による。⑤の官人と令史による裁判場面は脈望館鈔本にのみある。
- (4) 古名家雜劇本では、蔡婆が沖末で、寶天章の脚色は明記されていない。賽盧医も脚色が書かれていないが、張驢兒が付浄(副浄と同じ)とあることから、浄であるのは間違いない。惡徳界官は丑となっている。
- (5) 井上泰山「元雜劇の『搽旦』について」(『中国俗文学研究一』一九八三)参照。
- (6) 小松謙「元雜劇の開場について」(『中国文学報三八』一九八七)では沖末が他の末・旦・浄といった脚色とは違うレベルの「脚色」で、座長クラスによる口上役のようなもので、開場・散場に関わるとしている。冤罪を晴らし最後に「断」を行う役人が沖末とされているのも、散場との関わりで理解できる。
- (7) 脈望館鈔本では李景安の脚色は書かれていない。冤罪を晴らす役人の脚色も省略されている。古名家雜劇本・顧曲齋本では惡徳界官人と令史は登場しない。
- (8) 邦老や孤は具体的な役柄を指すもので、純粹に俳優を指す旦・末・浄などとは質的に違いがある。
- (9) 古名家雜劇本では王小二が外(末?)、惡徳府尹が外(浄?)、明察な府尹は孤となっている。
- (10) 元刊本は脚色については詳細ではない。古名家雜劇本では、犯人李文道の脚色は書かれていない。令史の脚色も省略されている。明察な府尹は孤となっている。
- (11) 元曲公案劇でも裁判が物語世界の秩序づけの道具として用いられている。物語世界の秩序づけの道具としての裁判については、小説を題材に論じたことがある。「『三言・二拍』の判語・判決」(『名古屋大学文学部研究論集 文学三五』一九八九)参照。
- (12) この点については斎藤(日下)翠「『正末』『正旦』考」(『日本中国学会報二五』一九七三)に既に指摘がある。
- (13) 元曲選本による。古名家雜劇本では、「守住」が「守住」に、「等待」が「等得」に、「昏地」が「昏霧」に、「旋風」が「旋風兒」になっている。
- (14) 次稿「元曲公案劇の構成—冤罪への手続き—」は(『名古屋大学中国語学文学論集五』一九九二)に掲載。